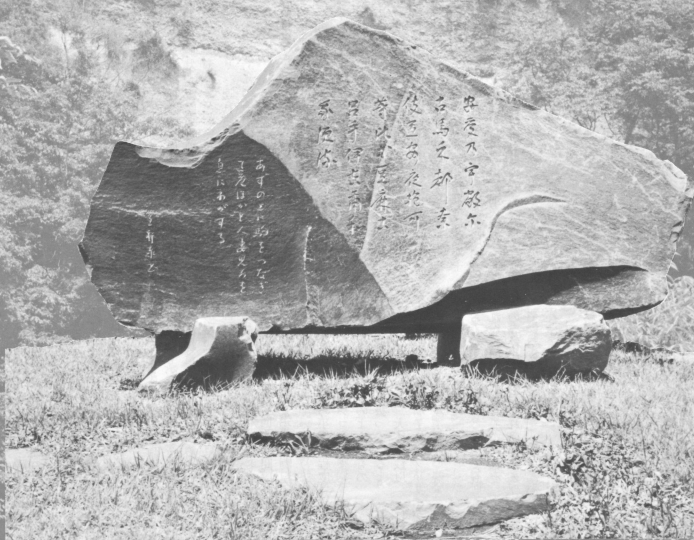


郷土ほんのり

第17号



- | | | | |
|-----------------------|---|---------------------|----|
| ▶飯能戦前おもちゃ物語..... | 2 | ▶館林ミニ紀行..... | 6 |
| ▶大山街道考..... | 4 | ▶西川古柳・没後百年の新事実..... | 8 |
| ▶阿須地区を見学して..... | 5 | ▶現住建造物保護にむけて..... | 10 |
| ▶高萩・久留里市との友好にむけて..... | 6 | ▶会のうごき..... | 10 |

○写真は、阿須にある崖と万葉歌碑

飯能戦前おもちゃ物語

赤田喜美男

五十年前の敗戦は、すべての日本人の生活の上にもさまざまな変化をもたらした。「戦前」と「戦後」の区切りのはっきりしていることにおいて、子どもの世界も大人の世界と同じであった。いやそれ以上であつたかも知れない。その大部分が良い方向に変化したことはいままでのないが、遊びの世界だけは必ずしもそうとはばかりは言えないような気がして、その昔、一番お世話になっていた子どもの遊び道具——玩具を中心に記録してみようと思う。

昔の遊び道具をいう場合、一般にイメージ化されているのは、竹とんぼ、竹馬、凧、風車、お手玉など、おそらく江戸時代から使われてきたであろう交相相伝の手作りの品々が主になるのだが、これらは「戦前」も通して使われてきた。しかし、昭和に入ると頃から玩具の世界にも技術革新があつたのが、ブリキやセルロイドが使われるようになり、量産物も出まわり当地でも売られるようになった。メンコ（メンチといひ）、べいごま、

と表に飛び出して、夕方まで遊び呆けたものだ。もちろんたまには宿題で頭を悩ますこともあつた。

子どもの生活圏は、学年が上がるに従つて広がっていったが、私の経験では、低学年の頃は、概ね同じ町内、中学年で吾野線（西武秩父線）の線路で括られる内側、高学年になると線路向こうの中山や今の南町方面にも遠征したりしたが、加治村や精明村はまだ遠い世界であつた。

駄菓子屋

毎日きまつて子どもの飛び込むのは、近所の駄菓子屋だ。私の記憶では、飯能の町内には駄菓子屋が十五、六軒あつて、だいたいおはさんの経営、どの店も屋号などなく、その家の苗字で呼んでいたものだ。私は、近所の「クボク」に律儀に通い、他の店に入った記憶がない。こ

子どもの生活のサイクルは、小学校から帰つて家にかばん（ランドセルも普及し始めていた）を置くと、母親が蒸かしてくれたおやつ（このころは、差は大きい）の小遣いをもらう

の店はほんの二坪の畳に学用品とせんべい、鉄砲だま、金華糖などの菓子類に玩具類を並べて商い、私達の平常の遊びの欲求を充たしてくれるのに十分であつた。

久久商店

大通り商店街の「煙久」は、飯能唯一のおもちゃの専門店であつた。幼い日に祖父に初めて連れられていってもらったときの衝撃は、今でも忘れることが出来ない。山にはありとあらゆる玩具類が山のように積み上げられ、まだ見たこともない品々が海のように広がっていた。天井にも限りなく凧や鉄砲や飛行機がぶらさがっていた。そして、声のやさしいおじさんが、お客の注文にその品を山の中から探し出すのが、手品のように見えたものだ。そして三年生ぐりになった、特別に五銭か十銭もらうことがあると、白銅貨を握りしめて勇躍煙久デパートへ出掛けたのであつた。

数年前、私の少年時代の思い出を書いた折、煙久の先代の娘さんで、当時のお店のことにも詳しい森ゆきさんをお願いして、飯能の玩具往来について伺つたことがある。そのメモを基にして、商店の側から見た玩具事情や流通について綴つてみよう。

「煙久商店」は、明治四十二年に大通り商店街（当時はまだ

飯能の宿と呼ばれていた）の真中に開店した。南高麗の煙の出身の横川久蔵創業なので、「煙久」を屋号にした。開店当初は、まだ武蔵野鉄道（現・西武池袋線）が開通していなかったの、店主自ら大八車を曳いて、泊まりがけで東京まで玩具の仕入れに出掛けたのであつた。それから後は鉄道便、昭和に入るとトラック便を利用するようになった。卸問屋は、主に東京の浅草橋や蔵前の玩具問屋街で、これは今でも軒を連ねている。問屋は大物屋に分かれていた。小物屋とは、毎日小遣い程度で買えるもの、メンコ、こま

おはじき、ビー玉のようなもので、駄菓子屋でも扱っているような品。大物とは、大体十銭以上の玩具、凧、羽子板、ブリキの模型、ビートル、火花、碁・将棋などであつた。

おもちゃは、季節ときつてもきれいな関係があつて、それぞれの季節によつて売れ筋が決まつていた。

正月もの

風類 夏ものは四国産が有名で、遠いので夏のうちに直接送られてきた。独特の型をもち、手書きで、百枚一束に梱包され、むしろで包まれていたが、季節はずれということで安価だとい

て、角凧、六角凧、奴風など十枚一束になつていて、販売期の直前に仕入れれば間にあつた。扇凧は大型で、凧の王者、長い尾を引いて高く揚がったが、高学年にならないうと揚がれなかつた。この絵はみんな手描きで武者絵が主で、川越の二百枚ぐらゐを重ね、製作部分は両側から割り竹で抑えて結わえ、リヤカーに載せて、主人兼職人が店まで運んできてくれた。



羽子板 羽子板は、押絵は飾りものにされ、描き絵が玩具用に使われ、安くて丈夫な実用品が好まれた。寸法は、尺（約四センチ）尺一、尺二などかね尺と呼ばれた。絵柄は女の子を描いたものが多く、焼絵に色付けがされ、必ず頭にリボンをつけて顔の部分には白く胡粉が塗つてあつた。素材は桐の張り合わせしなの木の材は木目細かく上物とされた。羽子板の産地は栃木方面が多く、国鉄輸送された。追羽根は、入間の野田や黒須あたりの農家の人が内職で作っていた。また、この羽根は串にいくつも差し連ねたものが美しいといわれ、部屋の飾りものとしてもよく売れた。

春もの

春になると戸外で遊ぶことが多くなるので、メンコ、べいごまなどがよく売れた。紙のメンコの画面は、映画もの、時代もの、相撲もの、マンガの絵などが多く、戦争にかかるころは写真メンも登場し、双葉山の全盛時代には、プロマイドとしてもよく売れた。メンコには角メンと丸メンがあった、寸法は寸半立てで丸メンは二寸、三寸、五寸ものといわれ、名古屋物の仕入れが多かったが、この辺の子どもには東京の方が好みに合っているようにみえた。

べいごまの型の種類は、高低、丸、角の組み合わせで分けられ、低型はベチャと呼ばれた。丸高型は大型べいと呼ばれたが、これは大学野球の影響でイニシヤルのW・K・M・H・R・Tなどが鋳込まれていた。六角べいはベチャでプロ野球のチーム名が入っていた。べいごまの産地は、川口の鋳物工場で、百個づつボール箱に詰められた石油箱に入って送られてきた。

なお、このメンコとべいごまは流行りだすと過熱することが多く、賭け事をしたり争いものも多くなったりし、勉強もおろそかになるというので、学校で禁止されたり取り上げを食うこともしばしばあったといわれるが、子ども達はそれをよく承知して

いて、ギリギリまでよく遊んだものだ。商店とすると、子ども達が目移りのしない選択時間もつがない、ありがたい商品であったが……。

メンコやべいごまの遊び場は、

学校からある程度離れた、よそから見えにくい広場が選ばれた。天王様や稲荷様の境内、家の裏の空き地などに何時の間にか大勢の子が集まってきて、隣のチームで背中が接するまで、隣のチームで勝負をして、時のたつのを忘れたものであった。

女の子の遊びにはゴム跳びがあった。子や輪ゴムや鉛ゴムの鎖つなぎをみんごまで作って、両端の二人がその長いひもを動かしたり廻したりして、歌に合わせて数人が跳んだ。しかし、これは集団遊びなので、数はそんなに売れなかった。同じゴムでもパチンコ用のゴム管は男の子がよく買っていた。

蠅石は男女を問わずよく売れた。これは柔らかい滑石を切り出したもので、秩父地方に主産地があり、七八センチの柱状に切ったものほか、ひっかけ、と称する滑石のかげも安値で売られていた。これは地面にも簡単に白い線を描くことが出来るので、石けりの円や角の凶面を描いたり、相撲の土俵を描くための必需品であった。そんなに消耗するものでもないのに、石ころに紛れてしまうのか

よく売れた品だ。角形のものにはボール箱に詰められて来たが、ひっかけは、かますに入れて運ばれて来た。

夏もの

夏の代表は火花だ。線香火花から棒火花、ねずみ火花に筒火花と種類も多く、バラ売りもセツト売りもあったが、バラ売りは火花の色や形、必ずやの方法から安全の説明まで、必ず火のたので、割り合い手間のかかる商いだった。

碁石や将棋のセツトは、テレビのない時代、縁台将棋が盛んでよく売れた。一度買えば暫く用をなすものなのに、駒一つでも失うと支障が出るものなので、売るときには必ず、王二つ、角二つ、桂四つ、歩十八というふうに数を確かめたものである。子ども用の軍隊将棋も戦時中はよく売れた。ヒコキ、戦車、地雷、スパイなどの駒を動かして敵の軍旗を奮うゲームで、興がのると、駒を積み上げて陣地を構築し、遠くから駒をはじいて敵陣をくずしあう駒らしい戦いにもなった。室内の兵隊ごっこでもあった。

秋は運動会のシーズン、派手に音の出るものが良く売れた。ピストルはブリキの百連発といつて、赤い紙に少量の火薬がは

さみ込んであるテープの渦巻きをセツトすれば、引き金を引く度に何十発も音がでて、兵隊ごつこの必需品になったし、かけつこのスタートの合図にも使われた。また、バクダンという玩具は、梅干ほどの鋳物の玉が二つに割れていて、その間に紙の火薬をはきみ紐で締め、空に投げ揚げると落ちてきて大きな爆発音を出したが、これは大きい子の遊び道具だった。

このほかにも玩具の種類は何百種類もあって、こまごましたものであったが、家族がみんなよく覚え、商いを手伝ったものだ。

「十銭店」

店売りのほか、移動販売をする人が何人かいたので、その人に卸売りもした。マイカーのない時代は、みな生活範囲は狭かった。特に山間地では飯能の町場まで遠いので、この移動店は「十銭店」などと呼ばれて結構重宝がられた。屋台のような台に日曜雑貨を載せ飾りして大型のりやカーに載せて、自転車で曳いて谷津の隈々まで出掛け、要所場所に留まっては鐘を鳴らして商っていた。日用品と一緒に玩具もよく売れたといわれる。

村々の子どもと玩具の出会い

露天商

の場は、祭礼と縁日であった。東京からくる香具師とは別に、この地方にも十人ばかりの人が露店を出した。成木の高水山、川越の大師様、矢風、毘沙門様、野田の弁天様、豊岡の甲子様、中山の天神様、名栗の今獅子、飯能の諏訪様と八幡様、今井の庚申様それに小学校の運動会などが出張開店日であったが、日数が少ないので農業の傍らの商いであつたようだった。そして普段店ではあまり売れない、小刀、がま口、鎖、手さげ、小型のハリーモニカのほか粗紙に刷つた八

銭位の露談本も若い人達にはよく売れた。講談師の人達は、印件天に地下足袋姿で、坂道を脚力頼りにりやカーで行き、竹ざおりにシートを掛けた即席の店を広げ、夜になるとカーパイロのガス灯をつけて、お祭りに彩りを添えた。この人達はお互いに商売上手いはずなのに、一人で店を出さず、たなくさん店が並んだ方がにぎやかになって、お客もたくさん来る、仲間同志結構仲が良かったというが、後継者は遂にいなかつたという話である。

電子玩具に少子化時代、半世紀前のことことも遠い昔の物語になってしまった。



大山街道考

島田 欽一

国定忠治のこと

今ではそのような風景を見ることは無くなってしまつたが、冬の枯れ季をねらつて井戸かえをしたものである。それには、組合の酔い(共同)仕事で、子どもまで総出て綱引きをして、井戸に放してある魚があがつてくるのが、また楽しであつた。いっぽう、その綱にかまつていた私が、まだ七つか八つもの頃だつたと思う。一緒に綱引きをしていた隣のお爺さんが、「おらが方の街道を国定忠治が通つたことがあるそつだ」とのひと言。それが私の子ども心に驚きとともに妙に印象づけられていたのである。

もとより、「……そつだ」というからには、お爺さんも聞き覚えに相違ない。しかし、今、そのことを追求してみると、「関東取締役から国定忠治召し捕りの廻状まわる」と史書にあるのが天保十三年九月のこと、隣の老爺さん(興助さん)、天保十三年の生まれだから、天保十三年は、それから僅々二十三年前のことで、そうすると「忠治が通つて来た」との話は、当然その親から聞いたものとして、差支えないと思われる。

もつとも、忠治とその時は追われて目をばはる身、実際に見たというより追跡して来た役人の話で、それが分かつたというものであろう。

本題に添うべく、だいぶ話が長くなつてしまつたが、「おらが方の道」双柳の通りは、明治になつてからまで大山街道の宿駅として栄えたことがある。そのことは、宿中に三軒の旅籠があつたことからしようなづけることである。

ちやうど八高線の線路に沿うようにして南へ延びるこの街道は、一口に大山道とは言つてもそれは近世でのことで、当然古代からの道であり、中世にあつては「八王子滝田に城あり、上州よりの道筋として」と古書にあるように、軍道として、また村から村へいゆる里道として、それなりの役割りを果たした

ていたようである。そのことは中居地内に「旗立」という小字があるが、武蔵風土記稿に「永祿六年(一五六三)北条氏康、松山城を攻めし所なり」とあつて、鎌倉街道の女影(日高市)あたりは指呼の間にあり、「ここに大軍あり」といふ、いわば牽制のためのものであつたらう。

鎌倉街道の裏道、あるいは山沿いの道とか、この街道については、鎌倉街道の上道、俗に言う「いざ鎌倉」の道を辿つて措かねばならない。

鎌倉街道上道

要図に示したように、越後から三國峠を越えてきた道と、碓氷峠の險路を経ての中山道が、高崎で一本になり、児玉、奈良橋、梨、女影、入間川、所沢を経て鎌倉へ、さらに南下して藤沢から府中へ、延々と続く道であるが、中世にあつては、この街道を舞台に幾多の合戦が行なわれたのである。年代順にそれを挙

げてみるならば
▽元弘三年(一二三三)
新田義貞、鎌倉方の松田貞国らと小手指原、久米川、分倍河原で戦ひ勝利を得て、一気に鎌倉を陥す。
▽建武二年(一二三五)
北条時行、足利直義軍と小手指原、女影原で戦ひ、勝利す。

▽正平七年(一二三五)
新田義宗、宗良親王を奉じ、小手指原、入間河原、高麗原に戦ひ、足利尊氏軍を敗る。
▽正平八年(一二三三)
足利基氏、入間川に在陣。
▽正平十八年(一二三六)
芳賀禪可と足利基氏の軍、苦林野に戦ひ、基氏勝利す。
▽水祿四年(一二六一)
今川氏真の將兵と景虎の軍と高麗原に於いて戦う。
▽永祿六年(一五六三)
北条氏康と武田信玄、松山城を陥す。(中居の旗立は、この時のものであろう。)

こうして、ざつと挙げてみただけで、鎌倉街道に沿つて、

いかに多くの合戦が行なわれて来たことか。それが鎌倉時代から始まり、後北条の時代にもっとも出入りが激しい。幕府の御家人達の往来、鑑文の駆け抜け方といった有様が目に浮かぶ。その外に、木曾義仲の子、清水冠者義高が、わずか十二歳で人質の身を逃れて来て、入間河原で頼朝の手に着て来せられて、今に残る身隠し地蔵の涙を誘う物語など、この道を辿れば、まさに歴史絵巻を繰り広げたようである。

大山街道

乱世の時代が過ぎ、やがて徳川の時代となれば、江戸から発しての五街道が要路となつて、鎌倉街道は、いわば用済み道となつてしまつたが、そこで登場するのは大山街道、信仰の道である。坪島から八王子、橋本と辿り、厚木、伊勢原と行くわけで、伊勢詣りの長旅も東海道へ出るには、このあたりの人達が決まつてここを通つていったものである。

もともと、こうした神仏詣でも半ばは遊山を兼ねた向きが多く、血なまぐさい戦国の世にあつてもよらぬことであり、江戸時代のそれも中期、ようやく世の中が安泰になつて来てからのことである。街道の諸々にある庚申塔の台



座などに刻まれている道しるべ
 「南大山へ」とあるが、村から
 村へ、川があればそこに渡し舟
 があるといったように、今に思
 えあまり気楽な旅でもなかつ
 たようである。

双柳に残る石尊様の金燈籠で
 あるが、各戸順送りの一夜づつ
 灯明をあげて拝んだもので、そ
 れは昭和になっても続いたので
 あった。

この石尊様であるが、江戸時
 代には雨降山大山寺と称し、石
 尊大権現が信仰の対象であつて、
 石尊詣りともいわれ、白衣振鈴
 の行者姿で通つて行ったといひ、
 明治の半ば生まれの人でも、そ
 れを覚えていて話してくれたも
 のである。

また、大山詣でといえは毛呂
 山町の国学者。権田直助に登
 場願わなければならぬ。この
 人、幕末の動乱の時代に勤王討
 幕の動きに身を投じ、晩年、明
 治六年に大山阿夫利神社の祠官
 となり、大山の興隆に尽くし、
 同二十年に没するまで勤めてい
 る。そうしてみると、毛呂山の
 人達は言うまでもなく、近郊近
 在みな「おらが方の大先生」と
 ばかり、大手を振つて登拝した
 に違いない。当然、権田直助か
 らの声もかかったことだろうし、
 この辺りの人達の大山詣でのも
 つとも盛んだつたということが
 考えられる。

こうして鎌倉街道と大山街道
 を主にして取り上げてきたが、
 歩いてみるとまさかと思うよう
 な小道に「大山へ」、「鎌倉へ」
 と刻んだ道しるべに出会うこと
 がある。そのことは、大山街道
 (山の道)が秩父から、また、
 奥多摩方面からの道など取り込
 んで、やがては鎌倉街道へ合流
 していった様子が分かるという
 ものである。

馬頭観音や庚申塔の台座に刻
 まれ、また単独の道しるべなど、
 そうした石を使つたものは、す
 べてと言つていいほど江戸時代
 の中期からのものであるが、そ
 こに「鎌倉みち」とあることは、
 よほど、「いざ鎌倉」のイメージ
 が濃かつたものであろう。

どこを歩いてみても、こうし
 た昔からの街道は、大凡新しい
 道に取り込まれてしまつたりし
 て、もはや往昔を偲ぶよすがと
 でないが、飯能地内、それも中
 居から宮沢へかけての街道は、
 果道や鉄道によつて分断されて
 いるとはいふものの、ほとんど
 通る人となにまにまに、その面
 影をとどめている。これは、ま
 こと珍しいことで、鎌倉時代か
 ら江戸時代を経て明治に至るま
 での、はるかな変転の歴史を思
 えば、もはや遺跡と呼ぶにふさ
 かしいといふものであろう。



阿須地区を 見学して

内野博司

平成九年一月十三日は、阿須地
 区見学の日でした。風が非常に強
 く、寒い日だったことが印象的で
 した。案内は青木寛幸氏によつて
 行なわれました。阿須はそれほ
 ど広い地域ではありませんが、
 興味深い場所が多くあります。

最初の見学地は、新しく建立
 された万葉歌碑で、万葉集の
 あずの上に駒をつなぎて危ほか
 ど人妻子ろを息に吾がする。は
 現在の阿須であろうとも言わ
 れています。「あず」の意味は、
 崖の崩れた場所を示し、「阿須」
 もまた、それに由来するものと
 考えられます。江戸時代には、
 行楽地としても知られ、つつし
 などが植えられたようです。文
 政五年(一八二二)江戸から秩
 父への旅の紀行文「秩父記」が
 独笑庵竹村立義によつて書かれ
 ましたが、阿須の地にも立ち寄
 つたことが記されています。

阿須は、古くから城跡や古戦
 場としても知られ、天正時代の

古地図にも記載が見られます。
 地名にも丹屋敷などの名もある
 とおり、丹党の一族が住んでい
 たようす。今から三十年位前
 までは、いかにも城跡らしい地
 形が残っていましたが、残念な
 がら、現在は関越道などの建設
 のために土が運び出され、当時
 の面影はありません。



新編・武蔵風土記稿より

阿須は、名栗川と成木川の合
 流する地点で、かつては何度も
 川の流れが変わつたそうです。
 入間川を渡るための船着場の跡
 も今日でも確認できます。

地学的にも興味深いものも多
 く、大古の昔、この周辺が海岸
 であつた頃、貝類の住みついた
 穴に鉄が集積して出来た「蛇籠
 石」が、大水の後に発見された
 こともあるそうです。また、亜
 炭の鉱山である「日豊鉱業」を
 見学しましたが、社長の豊田氏
 の説明によれば、亜炭は現在、
 有機質肥料の添加材や、家畜飼
 料の添加材など多方面に利用さ
 れているそうです。亜炭の由来
 は、今から百万年以上前に、大
 河の河口であつたこの地に、上
 流から流されて堆積したメセコ
 イヤなどの木材が炭化したものと
 言われています。なお、アケ
 ボノゾウの化石も、亜炭層の中
 から発見されたこともあります。

これらの他に、赤城山方面の
 北を向いた赤城神社、大山街道
 の道標、八王子軍人形の創立者
 である山岸柳吉(西川古柳)誕
 生の碑などを見学しました。
 現在、運動公園をはじめ、様
 々な施設が阿須地区に整備され
 つてあります。この地を訪れる
 機会がありましたら、その周辺
 も見ることをお勧めします。

千葉県 高萩・久留里市との友好にむけて

「大名」家を輩出した飯能武人 その歴史と関係市との親善の薦め」

吉田靖

(はじめに)

数年前のこと、飯能郷土史研究会の例会で、入会されたばかりの女性が発言された。

『私は飯能に移り住んで間がありませんが、当会に入会させていたゞき、飯能の歴史を学び、第二のふるさと飯能に誇りを持つことができました』

言葉は短かったが、郷土史研究会の存在価値を改めて教えられ、会員の一人として筆者、身の引き締まる思いでお聞きしたのを、つい昨日のように思い出す。

飯能郷土史研は言うまでもなく民間の任意団体であり、会員も会社員、農業者、公務員、主婦とさまざま。それだけに会を始め役員、事務局の方々のご苦労が察せられるのである。これらの方々は、冒頭の女性の発言にみられる会員、市民の期待に答えるべく、大きな努力を払われている。そしてこれまでも、単に郷土・武人の足跡にとどまらず、産業・文化・民俗の移り変わりなど広範な勉強と研究を続

けられている。

二十世紀を前に、正しい意味での温故知新、歴史認識の重要性が強く求められている時だけに、当会の重責ますます大となるだろう。さらに付け加えるなら、厳しい会の活動と運営を支えるのは一般会員であり、行政の理解ある対応ではないか。そう思えるのである。

中世飯能武人・丹党と

不出世中山氏の足跡と

前書きが長くなったが、筆者は知人に郷土史研への入会を勧めるさい必ず鎌倉幕府の草創期をはじめとする飯能武士の活動について語ることにしている。飯能の郷土武人というなら、その中心はやはり丹党加治氏であり、中山氏である。

丹党は武蔵七党の一つだが、平安末期に飯能まで埼玉県西部に腰をすえた丹党一族は鎌倉幕府の樹立に大きく貢献する。そして約四百年後、秀吉が全国制覇のため、最後に残った小田原北条攻めを敢行する。この時飯能武士は北条方であり、八王子城に立て籠もって、秀吉旗下の

徳川家康軍と戦う。この戦いで飯能武人は討ち死に落ちるが、敗れたりとはいえず、あまりの素晴らしい戦いぶりに感嘆したのが家康。この時八王子城は城主不在だったが、留守をあずかり城代としてつばに戦い自決した武将が、飯能中山の丹党武士中山家範(へえり)と知り、子どもももぞ立派な武士になるに違いない、ということを探し出されたのが、家範の長子中山助六郎照守(21)と弟の菊太郎信吉(15)。二人は江戸城に出仕、小姓として家康のそば近くに仕え忠勤に励む。その努力と武勇と知力を知った家康は二人を旗本として抜擢、照守を二代秀忠に付け、弟信吉を、六歳で二十五万石水戸藩城主となった鶴松君(徳川頼房)に付ける。これが兄弟出世のスタートとなる。

こうして照守は奉行として、信吉は水戸藩筆頭家老として、棟腕をふるうことになるのである。(信吉は祖先の地、飯能市中山の智観寺に葬られている。)やがて歴代の水戸藩筆頭家老の中山氏系は松岡(茨城県高萩

館林三二紀行 井上峰次

宝永四年(一七〇七)から飯能を領した黒田直邦が仕えた徳川綱吉(五代将軍は、寛文元年(一六六一)二十五万石で館林城に封じられた。郷土史研では、直邦が格別の恩顧を受けた綱吉の旧地、館林を一度訪ねてみたいという会員の希望もあって、平成八年九月に見学会を催した。年に一度のパスツアーだったが、参加は二十二名にとどまった。

上州館林というと、まずつづの郷・茂林寺と言われるが、一歩踏み込んでみると懐の深い、また孤がりのある街だと思えた。その館林を私は下見とも二度訪れたが、その程度でこの報告を書くのは気おくれては重い。

見学の日(十六日)は好天に恵まれ、バスは快調に館林に着いた。著名なつづじが岡公園はシーソー、オウムもいろいろ。まず尾曳稲荷神社を見学する。天文元年(一五三三)赤井照光が築城した館林城内に、守護神として祀りさ



田山花袋・旧居

された神社とされ、狐の尾曳きによって完工した城に因む、伝説を秘めた社でもある。境内は広く、社も江戸中末社建築の古格があらう、趣のある神社だった。次いで田山花袋の旧居を訪れた。館林市が重点をおく文化遺産として、花袋の遺構や事蹟、遺品などが各所に見られたが、この旧居もその代表と言える。尾曳神社と同様にの斜向いに建つ旧居は、木造茅葺きの平屋建、八畳一間と二畳が離れて二間。それに格調のついたごく普通の住居だった。その三畳に花袋は起き伏していたと伝えられている。

花袋が八才の明治十二年から七年間の少年時代をおくった旧居は、明治の民家のたゞすまいをそのまま明かして保存がはかまっていた。屋内がうす暗い、油っぽく感じられた。花袋、少年の頃が、父親十郎の戦死や長男の病死、薬種屋への下疳療養など決して明るいものではなかったのが、旧居の語さとなつたためであらうか。茅葺きの屋根は、地廻りも手入れが行き届き、前庭も整備されて、保存の気配りがひしひしと感じられた。

次いで旧居と同じ敷地に建つ第二資料館を見学し、その防内にある田山花袋記念館に入る。昭和六十一年に開館したという記念館は、鉄筋コンクリート造りで四八四平方メートル(四八坪強)の明るい建物。花袋の遺構、遺品、書簡など

市)一三方石藩主ともなり、明治維新に至るまで水戸・松岡領内て善政を施した。

高秋市民の中山氏への 思いは篤く両市交流も

飯能出身の武士が高秋市の殿様になっていた、ということでは高秋市史研の井上峰次会長らによって、「広域的郷土史研究」の提唱者である西野長治氏(加治郷土資料同好会前会長)ら有志十余名が高秋市を訪ねた。四年前のことである。

高秋市について驚いた。大久保清市長をはじめ、石井満教育長(当時)、議会内での郷土史研究の権威、船生佳紀(現市議会議長)ら、そうそうたる人達に迎えられたのである。



高秋市・丹生神社にて

これほど感激したことはない。そして松岡城跡の現地見学、歴代中山氏の地場産業振興や子弟教育の普及等々の実績について説明を受け、飯能出身武士の活躍に、訪問団一同、心も晴れやかに帰飯したのだった。

このときの交流がきっかけで高秋市も二年前、郷土史研究会(松本寿夫会長)員二十余名が設立された。同会は設立記念事業の一つとして中山の殿のふるさと飯能を訪ねる企画をたて、米飯されたが、飯能市と同郷土史研は一行を暖かく迎え、交流を行なったことは言うまでもない。

飯能郷土史研では市のバックアップも得て、今後さらに高秋・飯能両市民の親善交流を前進させたいと意欲を燃やす今日このころである。

久留里の里千葉集との 三市交流の構想も

もう一つ、交流を進めなければならぬ所がある。それは千葉県君津市である。君津市には久留里城という黒田氏三万石の居城がある。この黒田氏も丹党中山氏の出身であり、飯能の領主でもある。

初代「直邦」は丹党武士中山直張の三男だったが、幼くして母方の祖父黒田氏に養育され、黒田氏を名乗り、飯能をはじめ入間、比企などに領地を与えら

れるなど次第に加増され、ついに上州沼田城三万石の大名となり、石高こそ少ないものの、あつぱれ老中まで登りつめた大人物であった。

(直邦の墓は天覧山の北西、多峰山中腹にある。)

その子、直純・黒田氏二代とのとき、土総国千葉県久留里城主として移り、以後明治維新まで続いたが、歴代城主黒田氏は祖先の故郷、飯能の天覧山麓能仁寺境内に葬られている。

(むすび)

以上のように、中世以来の飯能武人の活躍は、この小さな郷土から二人の大名を輩出するという全国的にも珍しい歴史を残している。冒頭に記した女性会員の発言も、このような時代背景があつてのことではあるまいか。

その後、高秋市や君津市久留里では以前にも増して殿様の出身地、飯能との交流を望んでおり、当方としても井上会長や西野氏らが推奨してきたように、高秋・君津両市との交流と郷土史の広域研究の輪をもっともつと進める必要があるといえる。さいわいにして飯能市も歴史的にゆかりの深い高秋・君津両市との親善交流の重要性を前向きにとらえており、そうした意味でも三市交流の前途は明るい、といえるだろう。



館林城跡・三の丸土橋門

花袋にまつわる事柄、人々との交流の資料が豊富に陳列されていた。花袋が自然主義文学の代表者としての地位を不動のものにしたという、蒲団のナマ原稿や、日記遺品類、交流の深かったという山村、独歩等々の書翰の数々は、じっくり見学したかったが、限られた時間では一部をのみ見ることができなかった。またの機会のあることを願って、花袋記念館を辞し、館林に接した構文館と館林城の土塁を歩き、三の丸土橋門を見学した。

館林城の遺構はほとんどが失われていたが、僅かに残されているのがこの土塁で、それだけに保存しているが、僅かに残されているのは手が届かされてい、本丸土塁を防ぐ土指定史跡となり、崩落を防ぐ土止めも、豊頂部の樹木の管理も、草刈りも手抜きが見られなかった。高さが三、六米と認識されていた土塁が、三、三六、六十米にわたって築かれていたと言われ、さぞ壯麗であつたらう。現在はその殆どが失われ、数十米を残すのみとなつている。

建造物も明治当時の遺構は全く残らず、宝永五年(一七〇八)に再建されたという建物は、三の丸土橋門の復元城門のみ、歴史のある街としてはやや寂しいが、豊快な復元の門がそんな感傷を吹き飛ばしてくれた。

館林見学の終りは茂林寺。分福茶釜の說話で知れたた寺にふさわしく、古色に富む寺だった。応仁年間の開基と伝えられ、広大な境内に建つ堂宇(惣門)・廂(二一八)・(四六八)、山門・元禄七年(一六七四)、本堂・享保十三年(一七二八)は、何れも歴史の風格を感じさせた。それに、当の茶釜は柔らかならうらみをもつ器で、器形の美しきは伝説のイメージとは異なる趣を秘めていた。

館林からの帰途は太田の大光院(吾能橋)へ参詣して帰飯した。

秋の彼岸前の見学会は、まだ残暑がきびしく、汗を拭いながらだったが、教えられることの多い見学会だった。それは館林市が示してくれた保存と城の遺構への取り組みだ。城の遺構等失われながらも多かったことへの反省と、歴史と文化を後世に伝えようとする勇気を取り組みが合わさったことによるのかも知れない。

館林が歴史と文学の街として、また観光の田園都市として力を入れていくことが前に感じられたが、産業と近代化への取り組みも真剣だといふ。

これらの調和を図りながら発展して、今後も、「田舎教師」としての立場を持ち続けて欲しい。

車人形の創始者 西川古柳・没後百年の新事実

吉田 靖

八王子車人形「西川古柳一座」の飯能公演が三月一日、市民会館で開催された。公演は「初代西川古柳没後百周年記念・五代目吉柳家元襲名披露」として開催されたのだが、飯能市にはまだまだ馴染みの薄い芸能だけに、かえって市民の関心と呼び、千人余の人々が会場を埋めた。まことに記念公演にふさわしい盛況ぶりであった。

飯能郷土史研究会（井上峰次会長）は公演を旬日後に控えた例会で、車人形の創始者、初代西川古柳の記念碑を阿須に訪ね話し合いを行なった。もっとも同会は数年前、八王子市に車人形「西川古柳座」の稽古場を訪れたことがあり、加えて加治地区では郷土資料同好会が中心になって同一座の公演を成功させた経緯もあり、郷土史研会員の場合、車人形を知る人は比較的に多い。

車人形とその創始者
西川古柳のこと

一口に車人形といっても前述のように、一般的にはあまり知られていない。

滑車の三つ付いた小さな箱車に演技者が座り、人形をあやつりながら舞台を縦横に動きまわつて、説教浄瑠璃の語に合わせ演じるのである。といっても車が箱型だから体と車が一体として動きまわつた。そこで人形師は箱車に付いた紐をしっかりと腰にし、足で車を動かす。かつ人形の足となり、右手で人形の右手を、左手で人形の左手と頭をあやつり、目玉や口を動かしたりするのである。このような方式の人形浄瑠璃は非常に珍しく、昭和三十六年には東京都の無形文化財に指定されている。

この珍しい車人形浄瑠璃を完成させたのは誰であろう……、高麗郡阿須村三十一番屋敷（現・飯能市阿須）生まれの山岸柳吉だつたのである。

柳吉は、江戸末期の文化八年（一八一）織染職「経屋」（後に京屋）庄兵衛・トヨの四男として生まれた。親は兄弟で経屋を継いでほしいと期待していた

らしいが、彼は稼業に馴染まず十九歳で家を出、多摩郡大神村（現・昭島市大神）または八王子にあったという造り酒屋「石川酒造」（石川和吉）に小僧に入る。ところがその主とばかり幹人というか、大の芝居好き。とくに上方文楽にはすつかり魅されていたという。さいつかり商売の方は大繁盛。道楽の余裕はあったものようだ。

主が主なら、新参者ながら奉公人の柳吉。これがまた飛び抜けた芸事好きときている。柳吉なら話が分かつと、たまには説教浄瑠璃を見に同行させてもらったもの外れ。仕事はきたら道楽も桁外れ。仕事はきたら道楽も向いていないと考えた主人和吉は柳吉を好きにする。といつてもそこの好き同士、彼に家を一新持たせて、「好きなように人形浄瑠璃に打ち込めばいい」というのだから、さすが幹人。

追い出された柳吉、人形浄瑠璃に夢中になつたこと、いうまでもない。江戸はむろんのこと、本場関西にまで足を伸ばし、上方文楽にのめり込んだ（車人形研究家・久米井亮氏。こうして自ら工夫して車人形を案出、

八王子に本拠を置き、師匠西川伊三郎にならつて「西川古柳」一座を創設した……というのがこれまでの定説。

しかし、その後調べて新しい事実が次第に明らかになってきた。もし、新事実が確認されれば、八王子市や飯能市の初代西川古柳関係資料は書き換えなければなるまい。

石川酒造は健在

社長は福生市長
八王子が昭島にうつたとき
石川酒造とは、いつたいそのどつちだつたのか。

実はそのどちらでもなく、所在は多摩郡熊川村（現・福生市熊川）だつたのである。酒造所の在否も一般的には、すでに絶えたものとみられていた。しかし、今も福生市内に立派に存在していたのである。

石川酒造の所在が、なぜ八王子とか昭島といわれたのか、石川家十八代目にあたる石川酒造株式会社の大目太郎専務(32)によれば、それは当家十三代和吉が大神村（昭島）方面から石川家に養子にきたこともあるかもしれない。しかし、和吉の実家は正確には大神村の隣、上原村である。してみると山岸柳吉が大神村に住んでいたから、はいかつたところの方がごく自然ではないか、とこのことが。

旧家で、江戸時代は農業のかたわら商売を営んでいた。養子と吉はその第十三代主となつたわけだが、アイデアマンの彼、酒造業としては彼が初代だつたのである。

さて、左党ならご存じの方もおられよう。市内のかなり多くの酒屋さんで「和吉」という銘酒が販売されている。これは初代和吉を顕彰したものである。また「多満自慢（たまじまん）」といった銘酒も出回っている。これらは、いずれも石川酒造の銘酒なのである。

さらにいえば、現在の社長石川弥八郎氏(68)は福生市の市長さんでもある。二期目の現職で福生市民の生活・文化向上のため努力されている。

柳吉翁の活動した時代背景と心意気

柳吉が車人形の創案に成功したその原動力はなんだったのか、この点はかなり重要ではないだろうか。好きこそものの上手なれ、とはいひもの、好きなだけでは芸事の経済的、精神的困難さを思えば無理がある。

たとえば柳吉が研究した上方文楽、大阪の竹本座にしても豊竹座にしても、古い暖簾と大きな規模を誇りながら衰退している。上方のみならず、江戸でも歌舞伎に押され、しかも一体の人形を三人も操る不合理



初代西川古柳誕生の地記念碑



ろくろ車

から、文楽はいずれも経費倒れの状態が続いていた。したがって新しい人形芝居を創案したにしても、同じように衰退の運命をたどることは目に見えている。そんな時代背景が反映されていると見たい。

なまじのやりかたでは「座」の維持は困難と考えたのだろう。柳吉の逸話では柳吉 家でよく大きなソロバンを逆さにして乗っていたという。これが一体の人形を一人で操ることのできる車人形の発案のきっかけになったことは容易にうなずける。

師匠・西川伊三郎の名をいただいで西川古柳を芸名とした彼は、生涯を通じて西川材の産地である故郷飯能に絶えず思いを馳せていたという。そしてその終焉も飯能(伴玉三郎の縁先・長岡家)であったことを思うと、彼にとって「西川」以上の芸名はなかったに違いない。

彼は説教浄瑠璃など古い語りにも目を向け、明治になると自由民権運動や佐倉惣五郎など反権力的色彩のものも演劇に組み込んでおり、自由民権勢力の後

援まで得ていたという。(久米井亮江氏) 時代背景を抜きにしては柳吉を語れない所以。

周囲を泣かせて

発明者とか創業者というのは、どのような人物でも家族の犠牲なくしては事は成就しないと見ていいのではないか。柳吉の場合も同様、家族を顧みず、苦勞をかけたおしだったという。ほとんど家に寄り付かぬ道楽者だったらしく、家族に限らず広く親戚知人にかけて金や寝食を無心、迷惑をかけていたらしい。

多摩郡大神村(現・昭島市大神)に住んでいた柳吉が隣村の娘コト女を妻として迎えたのは柳吉二十八歳の時(コトは二十四歳)だから天保十年のころではないかと思われる。このころから柳吉の本格的な人形芝居道楽が始まるが、コトはよく道楽亭主を支え、明治十九年五月、五十八歳で他界。法名「実山妙証信女」



初代西川古柳の墓

柳吉は明治三十年九月、八十五歳で他界した。墓は次男玉三郎の養子先の菩提寺、飯能市東町の玉宝寺にある。その法名も

人形浄瑠璃にちなみ「浄亭寿仙信士」とある。

他人には迷惑ばかりかけて生きた柳吉では迷惑があつたが、そのことを自分で自覚していた。そこが彼の良さであり、可愛いところだったといえる。彼が妻コトに口癖に言った言葉が久米井氏の資料にある。「おれのような道楽な生き方を子どもにさせてはならぬ。人形はおれだけではない」と。

柳吉の強い意志により長男辰五郎は好きな芝居から離され、機屋奉公したとの話もあるが、どのようかな人生を選つたのか、今は明らかではない。また次男玉三郎は高麗郡前田村(現・飯能市東町)の長岡家に養子に行つてゐる。(柳吉の阿須の生家経屋と長岡家は共に織染業であつたことに注目したい。)

もともと山岸家に柳吉のような道楽息子が突然変異のようにできたというのではない。経屋という屋号でも推測できるように、父親庄兵衛をはじめ一家は代々説教浄瑠璃好きの家系だったとされている。したがって戦後まで笛や太鼓、三味線が残っていたそうだが、昭和二十八年の阿須大火(民家十一軒焼失)のさい、そうしたもの一切を焼

は争えない、山岸家当主の茂さんも大の芸事好きとか。こうして八王子車人形「西川

古柳座」は二代目として、初代古柳こと柳吉太郎が襲義を伝授された潮沼四代時雄、五代現忠亨と代々潮沼氏が車人形一座を守り、ろくろ車の改善など伝統は

伝統として守りつづ、フراعメンなど洋舞も取り入れ、創意工夫を織り混ぜながら芸道に精進している。最近是国内各地にもよって、海外でも数多く公演するまでになつてゐる。亡くなつてから今年ちょうど百年になる

柳吉も、草場の蔭で八王子車人形の隆盛を大いに喜び、潮沼氏の努力に感謝しているに違いない。

初代古柳の顕彰碑

生家の前山に建立

飯能市阿須の里道交差点近くに柳吉の生家、山岸家がある。その前山には「車人形元祖西川古柳誕生之地」と記された顕彰碑が建てられている。昭和四十七月に建立されたもので、碑文は八王子市文化財専門委員で文楽研究家の久米井亮江氏が、書は同市文化財専門委員の小松茂盛氏が担当、自然石の記念碑は増島徳飯能市長が揮毫している。碑文には次のように書かれてい

る。「初に阿須の青山を出て夕には入間川の流しに月影を碎いて帰る瀟瀟の五十年世紀の名人人形師人間柳吉の面影をしのぶ

ものに車人形がある。東の車人形は江戸末期から影絵と共に武蔵野に咲き初めた一輪の山月柳である。作者古柳は本名山岸柳吉文化八年(一八一)七月十三日、当時埼玉県高麗郡阿須村三十一番屋敷に庄兵衛・冠との四男として生まれた。術冠の頃業

に出て文楽を見習い、後八王子宿に住んでこれを考案したと伝えられる。昭和三十三年三月、東京郡は無形文化財に指定した。枯淡な中世説教師と天外の技法に乗る人形の秘芸は西の文楽に並ぶと云うべきであり、その風雅を愛し面影を慕い今故人ゆかりの地に建碑して広く歳月に見えんとぞするなり。昭和四十年七月吉日」(一部文字を変えてあります)。

|| 追伸 この西川古柳物語については柳吉の生家、山岸氏本人のよねさん(柳吉より四代目夫人・80)や、現当主茂さん(58)淑子夫人、直系鈴木しずのさん(90)、玉三郎の縁組先、長岡家の貞太郎さん、石川酒造、玉宝寺などの皆さんのご教示をいただきました。||



車人形の頭 文七(熊谷直実)

平成八年度に文化財保護法が改正され、建造物については、文化財登録制度の導入によって、所有者の意志を尊重しつつ、自発的な保護を図ろうとする政策が取られることになった。

建造物については

①大量の近代建造物の緊急保存

②全国で約二万五千件の物件が調査済み

③近代建造物の有効保護

④制度の実現に努めている

⑤建造物の登録を行なう

を目的として、建造物を対象に家屋・倉庫・社寺・事務所等の建築物のほか、橋・ダム・トンネル・堤防などの土木構造物・煙突・塀などの工作物も含まれている。

わけても建築後五十年以上を経過した建造物については

①国土の歴史的景観に寄与しているもの

②造形の規範となつていているもの

③再現するのが容易でないもの

のいずれかに該当するものを挙



現住建造物 保護にむけて

岡野達雄

げている。

何せ多種、多様かつ大量な数にのぼるもので、文化財としての認識や評価も定着していないものが多く、現行の登録候補とした二万五千件のうち十％は、直ちに滅失の危機にあるといわれるものばかりだ。

では、登録制度を受けるとどうなるのだろうか

①登録有形文化財の土地等について、地価税の半の軽減

②登録有形文化財の家屋等について、固定資産税の半の軽減

③運用経費の低利融資

などの支援措置が計られるという

また、飯能市内には対象となつる近代建造物が数多く見受けられます。一例を挙げると

吾野飯山、旧川中織物会社事務所、飯能織物協同組合事務所、旧三十六銀行飯能支店、小瀬戸取入口、久須美沈池、本郷配浄水場、水道橋、御典橋、諏訪橋、芳延橋、降魔橋、畑のトンネル、JR八高線入間川橋梁、西武鉄道東飯能駅などあります



平成八年度
主な活動

●四月例会(1/2)

落合上の台遺蹟と
小瀬戸・大河原の銅版絵
講師・柳戸信吾氏

●六月例会(2/2)

記念講演
「縄文時代のあけぼの」
小岩井渡邊達雄の調査から
講師・中島 宏氏

●九月例会(3/2)

「郷土はんのう」第16号発行
館林方面バスツアー
茂林寺・田山花袋記念館・城跡公園、他。参加23名

●十二月例会(4/2)

事後学習会
おもしろ郷土史
講師・増岡正文氏
歴史と事実のはざま
南高麗郷土史を刊行して
見学会・阿須

●三月(5/2)

八王子車人形公演
郷土史研として公演に対する協力をす。



平成9年度の活動予定

▼五月

地場産業の見学会
埼玉県・茶業試験場見学会

▼六月

総会・記念座談会
「建築に見る木の文化」
近代化遺産を中心に

▼九月

歴史散歩
絵馬の見学

▼十二月

事後学習会
二月
建物の見学

入会のお勧め!

当会では広く会員を募集しております。(特にお若い方々の入会を歓迎いたします)

歴史・民俗・地域文化等、興味のある方は、いつでもお気軽にお申し出ください。

入会の受け付けは、郷土館内にある事務局まで!

72-114-14



★特別展絵馬★
10月15日～11月30日

郷土館の催物

★ミニ展★
並木本家の飯能焼のコレクション
7月12日～8月31日

うしろがき……
どの本読もうかな? ……と迷っている時は、郷土はんのうをどうぞ。
古い話から、新しい話までたくさん載せてあります。
どうも皆様のご協力を有難うございました。(岡野)

郷土はんのう 第十七号
発行日 平成九年六月二十三日
発行所 飯能郷土史研究会
飯能市飯能二五八一
飯能市郷土館内(〒370)
☎〇四九七二二四一四

題 字 小谷野 寛 一
表紙写真 井上 峰 次